



扉 未来に向けて

仁茂田芳枝 1



まなぶということ

大野和興 2



詩 獣道

野口正士 4



特集

再生産されない労働

社会の再生産に求められる新たな変革

北村 巖 6

価格転嫁や最賃引き上げで賃上げの環境を

新井栄三 10

人口減、地元資本縮小、なくなる働き口

川口充律 14

農の再生産のためにいま、やるべきこと

大野和興 16

再生産が問われるバス職場

新井悠人 20

日本のうしろ 世界のうしろ

連合大会と労働者、労働組合の課題

荒川創太

全米自動車労組のストライキ

山崎 憲 22

政府が「統一教会」にたいする解散命令請求を提出

山口 広

国家と教育 9 戦後の道德教育の理念

松村好恵 33

職場の法律相談 心の病の労災認定基準が改正

花垣存彦 52

憲法 終 「アジア的」なるものについて

北川鑑一 55

誌上学習会『イギリスにおける労働者階級の状態』13
諸結果 ③

59

◆ キャラバンサライ

38

◆ スポーツ時評

40

◆ 世界はいま

42

◆ 経済を知ろう！

44

◆ 数字を疑え

46

◆ 中国観看

48

◆ たちみ席

50

◆ 働く現場から

51

◆ 情報BOX

63

◆ 北から南から

65

◆ センターと
みなさんをつなぐ

68

カット＝野崎安希子

まなぶということ

戦前は、すでにそこまで

大野 和興

台湾有事で中国が攻めてくると自公政権が煽り立て、日本の食料自給率が極端に低いことに結びつけ、この国の最高学府・東京大学の教授が「このままでは日本人が飢える」とのたまひ、右も左も「食料安保」「食料安保」と連呼します。自公政権は、この声を背に来年の通常国会に有事のさいの食料確保を定めた法案を準備します。その中には作付け作物の強制的な転換などが盛り込まれています。アジア太平洋戦争の真つただ中の1940年生まれの筆者にとって、なんだか聞いたような話だなどという既視感がわいてきました。

作家田宮虎彦の作品に「花」という中篇があります。戦争が終盤に入り、戦地は泥沼状態となり、内地でも食料不足が目立つようになっていました。1938年、すべての人的物的資源を政府が統制し、戦争遂行に集中する国家総動員法がつくられました。41年には、それを受け

て農産物作付け制限・禁止の権限を政府に与える「臨時農地等管理令」が交付されました。日本が真珠湾を攻撃した年です。果樹、花、お茶、桑など腹の足しにならない作物の米、麦、サツマイモなどへの転換が強制されました。

田宮の「花」は、農家の努力で花産地として東京市場で名をはせていた房総の村を舞台に、国からの命令で畑の花を引き抜き、種や球根を燃やす花栽培への抑圧が吹き荒れる中、「非国民」と罵声を浴びせられながら花づくりをつづける農婦ハマの静かな抵抗を描いた作品です。事実をもとに綿密な検証を重ねた小説「花」を原作に、1989年には堀川弘通監督で「花物語」というタイトルで映画化されます。今年12月2日、第17回「国際有機農業映画祭」で本場に久しぶりに、筆者の提案もあって上映されました。

話は冒頭に戻ります。食料自給を強調し、食料安保を叫べば叫ぶほど、農と食は国家に取り込まれ、農民は好きな農業をする自由と権利を、市民は花を愛でる自由と権利を失います。すでに戦前はそこまで来ているのです。

(農業ジャーナリスト)